

菅公歴史館

菅公として知られる菅原道真公（845-903）は、学問・文化・芸術の祭神である天神として太宰府天満宮に祀られている。伝統的な博多人形による16の展示は、道真公の数奇な生と死の物語を表現したものである。また、全国から集められた様々な「天神人形」や、太宰府天満宮での数々の式典で使われる工芸品等も展示されている。

菅原道真公の一生における16の場面

博多人形（はかたにんぎょう）とは、福岡の博多地区で作られる素焼きの人形である。その起源は17世紀にまで遡り、優雅で細部まで精巧に造形された人形として知られている。ここに展示されているのは、博多人形でも珍しい、仕立ての良いミニチュアの着物姿のものである。

1. 梅花の詩（849年、5歳）

道真公は幼少の頃には優れた詩の才能を発揮していた。このシーンでの彼は、その年齢では特筆すべき出来の和歌を詠んでいる。内容は次の通りである：

うつくしや

紅の色なる

梅の花

あこが顔にも

つけたくぞある

とても美しい

紅色の梅の花

（その花で）私の頬を飾ってみたい

2. 母の祈り（859 年、15 歳）

道真公は体が弱かったため、母君は毎日近所のお寺に行き、慈悲の菩薩である観音様に祈りを捧げていた。息子が学業に成功し、たくましく成長するようにと願ったところ、彼女の心からの祈りは聞き届けられた。

3. 文武両道（870 年、26 歳）

道真公は学者の家系に育ったため、周囲の人々は彼を身体能力はあまり高くないと考えがちであった。が、実際には弓の名手であった。ここでは、道真公は弓射の大会に参加し、全射的中させて最高点を獲得している。

4. 文章博士（877 年、33 歳）

漢語と中国文化が朝廷で主流だった時代、官職は中国古典に精通していることが認定された者に与えられた。道真公は 26 歳という異例の若さで、宮中の官吏養成機関の最高レベルの試験に合格し、33 歳で最高位の "文章博士 "の地位を得たのである。このシーンでの彼は学生たちを指導しているところだ。

5. 詩的外交（883 年、39 歳）

道真公は、外国からの使者をもてなし、日本の文化的成果を披露することもあった。渤海（かつて中国東北部と朝鮮半島北部を支配していた王国）からの来訪者を歓迎するため、道真公は巧みな漢詩を作り、詠んだ。彼の能力は長く印象に残るものであったという。

6. 慈悲深い官吏（886 年、42 歳）

道真公は遠く離れた讃岐国（現在の香川県）の統治に派遣された。貧しい農民達に同情し、その行政手腕を貧しい人々の支援に役立てたことで、彼はやがて人々から尊敬されるようになった。日本各地での経験は、彼が行政改革にあたる際に貢献することになる。ここでの道真公は、干ばつ時の食糧配給のために倉庫を開いている。

7. 紅葉の錦（898 年、54 歳）

宇多天皇（866-931）と秋の行幸に出かけた道真公は、奈良の手向山にある神社を訪れた。そ

ここで詠んだ有名な歌は、後に百人一首にも選ばれた。

この旅は

ぬさも とりあえず

たむけやま

紅葉の錦

神のまにまに

この旅では、神様に捧げる幣を用意しそびれてしまった。

神様、もしよろしければ、手向の山の紅葉の錦をお受け取りください。

ここでは、鮮やかな紅葉の下で馬に乗る天皇に付き従う道真公の姿が描かれている。

8. 天皇からの下賜品（西暦 900 年、56 歳）

道真は宮中の歌会で「秋の思ひ出」と呼ばれる歌を詠んだ。醍醐天皇（885-930）は感嘆し、褒美として自分の衣を脱いで道真に下賜された。この異例の振る舞いは、道真公の非凡な才能への賛辞であった。

9. 左遷（901 年、57 歳）

道真公は大臣として大成功を収めたが、そのため朝廷に大きな勢力を持つ藤原氏との間に問題が生じるようになっていた。道真公を妬むライバル達によって流された道真公が陰謀に加わったという噂により、天皇は道真公を京都から大宰府へと左遷させる。このシーンでは、道真公が都から左遷を告げられている。

10. さらば梅の花よ（901 年、57 歳）

梅は中国から伝来したもので、高貴な文化の象徴とされていた。道真公の梅好きはよく知られており、京都を去る前に、庭の梅の木に哀歌を詠んだという。

東風吹かば

匂いおこせよ

梅の花

主無しとて

春な忘れそ

春の風が吹いたら

香りを届けてほしい

花開く私の梅よ

主人が居なくなったからといっても

春が来ることを忘れるな

伝承によれば、道真公が去った後、この木は彼の不在に耐えられなくなった。そのため根こそぎ大宰府まで飛んでいき、「飛梅」と呼ばれるようになった。現在その梅は太宰府天満宮の本殿前にあり、毎年花を咲かせているという。また、この梅の木を、道真公が残していかざるを得なかった家族の比喻と解釈する学者もいる。この場面で道真公は、妻が泣く中、梅の歌を詠んでいる。

11. 都を去る（901 年、57 歳）

京都郊外のこの場面では、道真公の旅立ちを沿道の人々が見送っている（背景の行列がそれを表している）。道真公が遠く太宰府へ旅立つのを惜しむ人々は、道真公の追放は不当だと感じている。

12. 道明寺での別れ（901 年、57 歳）

道真公は大宰府に向かう途中、河内国（現在の大阪府内）の道明寺の尼である叔母を訪ねた。二人は多くを語り合ったが、天皇の使いが夜明けに道真公を起こし、強引に先へ進ませた。この場面は、叔母が道真公の出発を見送っているところだ。

13. 博多港到着（901 年、57 歳）

道真公に同行が許されたのは、息子の熊麻呂と娘の紅姫、そして弟子一人だけだった。長旅で疲れ果てた一行は、ようやく博多湾の港に到着する。左側では、漁師が縄を巻いて道真公が休めるよう席を作っている。

14. 追憶（西暦 902 年、58 歳）

太宰府では、道真公は南館と呼ばれる荒れ果てた官舎に居を構え、他の大宰府役人は道真公と話すことを禁じられていた。前年の歌会から一周年になる日（展示 8 参照）、道真公は醍醐天皇から賜った衣を取り出した。道真公は恨むどころか、醍醐天皇の多幸を祈り、これからも献身に励む歌を詠んだ。このシーンでは、道真公は頭を下げながら置まれた衣を見つめている。

15. 頂きでの祈り（西暦 902 年、58 歳）

ひどい暴風雨にもかかわらず、道真公は天に向かって潔白を訴えるため、太宰府天満宮の南西約 5 キロにある天拝山の山頂に登った。この場面では、彼が貴族や天皇に文書を差し出すときに使う（直接手紙を渡さないようにするための）杖である「杖（ふづえ）」を持っているのがわかる。道真公は、雷鳴と稲妻の中で、その訴えを在した杖を用いており、祈りを捧げているのである。京都では、道真公の怨霊が都に災いをもたらしたという伝説があるが、道真公には都への悪い念などなく、むしろ国や天皇の安寧を祈ることが多かった。

16. 安息の地（903 年、59 歳）

道真公は劣悪な生活環境からくる病に冒され、自宅で息を引き取った。従者が遺体を牛車に積んで運んだが、道を半分ほど来たところでその牛が突然止まり、それ以上進まなくなった。道真公の従者は、牛が拒否したのは主君の意志の表れであり、主君はこの地に葬られることを望んだのだと判断した。道真公を埋葬した後、従者はそこに祠を建てた。これが太宰府天満宮の由来である。

天神人形

これらは室町時代（1338～1573 年）に誕生したと言われる道真公のミニチュア人形で、神社で売られる地域の土産物として全国に広まった。地域の職人が作る天神人形は、その産地によって素材や作風が異なる。天神人形はお供え物としてのものから子供の玩具まで、さまざまな用途で作られている。

太宰府天満宮の祭礼

太宰府天満宮では、毎年行われる神幸行事（神幸式）をはじめ、年間を通して 100 を超える式典が行われる。秋の神幸式大祭では天神様は天満宮御本殿から道真公の旧居跡まで送られ、そこで一夜を過ごす。太宰府天満宮の祭礼は、神職や参加者が平安時代（794-12 世紀後半）の伝統的な衣装を身にまとうことで知られる。また、学問や芸術にも重点が置かれており、詩の朗読

や書道の披露、受験生の合格祈願などといったものもある。